

日本の名作名文ハイライト

# ヴェイヨンの妻

太宰治

朗読 高橋君江

出所 朗読散歩

<http://www.voiceblog.jp/kunkobaribari/>

teabreak 編

## ヴィヨンの妻

太宰治

あわただしく、玄関をあける音が聞えて、私はその音で、眼をさましました。それは泥酔の夫の、深夜の帰宅にきまっているので「ございますから、そのまま黙って寝ていました。」

それは、隣の部屋に電気をつけ、はあっはあっ、とすさまじく荒い呼吸をしながら、机の引出しや本箱の引出しをあけて掻きまわし、何やら捜している様子でしたが、やがて、どたりと畳に腰をおろして座ったような物音が聞えまして、あとはただ、はあっはあっという荒い呼吸ばかりで、何をしている事やら、私が寝たまま、

「おかえりなさいまし。ごはんは、おすみですか？ お戸棚に、おむすびがございますけど」

と申しますと、

「や、ありがとう」といつになく優しい返事をいたしました。「坊やはどうです。熱は、まだありますか？」とたずねます。

これも珍らしい事でしたが。坊やは、来年は四つになるのですが、栄養不足のせい、または夫の酒毒のせい、病毒のせい、よその二つの子供よりも小さいくらいで、歩く足許さえおぼつかなく、言葉もウマウマとか、イヤイヤとかを言えるくらいが関の山で、脳が悪いのではないかとも思われ、私はこの子を銭湯に連れて行きはだか

にして抱き上げて、あんまり小さく醜く痩せているので、凄しくなつて、おおぜいの人の前で泣いてしまった事さえございました。そうしてこの子は、しょっちゅう、おなかをこわしたり、熱を出したり、それはほとんど家に落ちついている事はなく、子供の事など何と思つているのやら、坊やが熱を出しまして、と私が言つても、あ、そう、お医者に連れて行ったらいいでしょう、と言つて、いそがしげに二重回しを羽織つてどこかへ出掛けてしまいます。お医者に連れて行きたくつても、お金も何もないのですから、私は坊やに添寝して、坊やの頭を黙つて撫でてやっているより他はないのでございませう。

けれどもその夜はどういうわけか、いやに優しく、坊やの熱はどうだ、など珍らしくたずねて下さつて、私はうれしいよりも、何だかおそろしい予感で、脊筋が寒くなりました。何とも返辞の仕様がなく黙つていますと、それから、しばらくは、ただ、その烈しい呼吸ばかり聞えていましたが、

「ごめん下さい」

と、女のほそい声が玄関で致します。私は、総身に冷水を浴びせられたように、ぞつとしました。

「ごめん下さい。大谷さん」

こんどは、ちよつと鋭い語調でした。同時に、玄関のあく音がして、

「大谷さん！ いらっしやるんでしよう？」

と、はっきり怒っている声で言うのが聞えました。

それは、その時やっと玄関に出た様子で、

「なんだい」

と、ひどくおどおどしているような、まの抜けた返辞をいたしました。

「なんだいではありませんよ」と女は、声をひそめて言い、「こんな、ちゃんとしたお家もあるくせに、どろぼうを働くなんて、どうした事です。ひとのわるい冗談はよして、あれを返して下さい。でなければ、私はこれからすぐ警察に訴えます」

「何を言うんだ。失敬な事を言うな。ここは、お前たちの来るところではない。帰れ！ 帰らなければ、僕のほうからお前たちを訴えてやる」

その時、もうひとりの男の声が出ました。

「先生、いい度胸だね。お前たちの来るところではない、とは出かした。呆れてものが言えねえや。他の事とは違う。よその家の金を、あんな、冗談にも程度がありますよ。いままでだって、私たち夫婦は、あんなのために、どれだけ苦勞をさせられて来たか、わからねえのだ。それなのに、こんな、今夜のような情ねえ事をし出かしてくれる。先生、私は見そこないましたよ」

「ゆすりだ」と夫は、威たけ高に言うのですが、その声は震えてい

ました。「恐喝だ。帰れ！ 文句があるなら、あした聞く」

「たいへんな事を言いやがるなあ、先生、すっかりもう一人前の悪党だ。それではもう警察へお願いするより手がねえぜ」

その言葉の響きには、私の全身鳥肌立ったほどの凄惨な憎悪がこもっていました。

「勝手にしろ！」と叫ぶ夫の声はすでに上ずって、空虚な感じのものでした。

私は起きて寝巻きの上に羽織を引掛け、玄関に出て、二人のお客に、「いらっしやいまして挨拶しました。」

「や、これは奥さんですか」

膝きりの短い外套を着た五十すぎくらいの丸顔の男のひとが、少しも笑わずに私に向かってちよっと首肯くように会釈しました。

女のほうは四十前後の痩せて小さい、身なりのきちんとしたひとでした。

「こんな夜中にあがりまして」

とその女のひとは、やはり少しも笑わずにシヨールをはずして私にお辞儀をかえました。

その時、矢庭に夫は、下駄を突っかけて外に飛び出ようと思いました。

「おっと、そいつあいけない」

男のひとは、その夫の片腕をとらえ、二人は瞬時にもみ合いました。

「放せ！ 刺すぞ」

その右手にジャックナイフが光っていました。そのナイフは、その愛蔵のものでございまして、たしか夫の机の引出しの中にあつたので、それではさつき夫が家へ帰るなり何だか引出しを掻きまわしていたようでしたが、かねてこんな事になるのを予期して、ナイフを捜し、懐にいられていたのに、違いありません。

男のひとは身をひきました。そのすきに夫は大きい鴉のように二重回しの袖をひるがえして、外に飛び出しました。

「どろぼう！」

と男のひとは大声を挙げ、つづいて外に飛び出そうとしましたが、私は、はだしで土間に降りて男を抱いて引きとめ、

「およしなさいまし。どちらにもお怪我があつては、なりません。

あとの始末は、私がいたします」

と申しますと、傍から四十の女のひとも、

「そうですね、とうさん。気ちがい刃物です。何をするかわかりません」

と言いました。

「ちきしょう！ 警察だ。もう承知できねえ」

ぼんやり外の暗闇を見ながら、ひとりごとのようにそう呟き、けれ

ども、その男のひとの総身の力はすでに抜けてしまっていました。

「すみません。どうぞ、おあがりになって、お話を聞かして下さいまし」

と言って私は式台にあがってしゃがみ、

「私でも、あとの始末はできるかも知れませんから。どうぞ、おあがりになって、どうぞ。きたないところですけど」

二人の客は顔を見あわせ、幽かに首肯き合って、それから男のひとは様子をあらため、

「何とおっしゃっても、私どもの気持は、もうきまっています。しかし、これまでの経緯は一応、奥さんに申し上げて置きます」

「はあ、どうぞ。おあがりになって。そうして、ゆっくり」

「いや、そんな、ゆっくりもしておられません」

と言い、男のひとは外套を脱ぎかけました。